髪結い夫婦はアナーキー

レスラー、パンク、モヒカン……1000円

▼ パンク系やモヒカン、プロレスラーカットも得意な1000円カットの店「ジプシーウェイ」店主の泉克久さんと妻の明美さん（杉並区の阿佐ヶ谷店内で）

枝川公一の東京ストーリー

巷で流行る、男たちの千円カット。髪をカットするだけ。ひげ剃りなし、シャンプーなし。所要時間は10分前後。代金1000円。

この店も「せんえんかった」を名乗る。しかし、他とはちがう。パンク系もモヒカンも、襟足長いプロレスラーカットも、1000円。店主の泉克久さん(44)自身、髪を短く刈って形をそれらしく整えるソフトモヒカン。

ここは、JR阿佐ヶ谷駅に近い横丁、有名和菓子店の隣にある「ジプシーウェイ」。店名は、ある人気プロレスラー・コンビから贈られた。

店は、7坪あまりのウナギの寝床。理美容椅子はひとつだけ。もうひとつは予備。床が黒とピンクのチェック。BGMはハードなロック。したがって、年寄りの客がつづくとボリュームをどんどん下げていき、やがて音が消えてしまう。

泉さんが千円カットを初めて知ったのは10年前、赤坂見附のカットハウスに勤めたときである。

「目前のお客の頭をバンバン片づけていくのが気持ちがよかった。ぼくの性に合っている。数がかければいろんな人に出会える。それもおもしろかった」

30代の半ばにもなっていなかったけれど、25歳でオープン6年続けた美容室を閉めるという、苦い経験をすでにしていた。

20代の泉さんの美容室は「アナーキー」。高校生の時から同名のパンクバンドが大好きで、同じ名前の店を持つことを念願していた。夢がかなった。折からバンドブーム。目立つ髪型にこだわる若者たちが、この美容室に集まった。人呼んでパンク美容室。

泉さん、売れっ子になり、テレビなどの取材が殺到した。バンドのメンバーに呼ばれて楽屋まで出張髪結いしたことも。

大忙し。レゲエのドレッドヘアなど、髪を編み込んだり、逆毛立てたりする力技がたたり、手の腱を痛めた。腱鞘炎で店を閉じ、手術をしたのである。

泉さんの妻で美容師の明美さん(38)は、手が痛くて当たり散らす夫を持て余した。一方、妻にも弱点があった。手が荒れやすく、すぐ化膿すること。夫婦はお互いにやりきれない思いをした。「彼は腱が弱い、私は皮膚が弱い」と妻。

そんなふたりに、千円カットは福音になった。カットなら力が要らないから手への負担は軽い。また、薬液を使わないので皮膚は痛まない。そのうえ、ふたりとも、新しいことに飛びつくのが好き。

働き、資金を貯め、昨年の春、JR阿佐ヶ谷駅近くと隣の高円寺駅界隈とに、千円カットの店がめでたく2軒そろった。夫婦で1軒ずつ担当する。

もっとも泉さん、安いだけの千円カットでは満足しない。パンク好きの虫が騒ぎ出す。

さまざまな髪型に合わせた千円カットを考案する。たとえば、坊主頭に細かいほかしを入れたり。普通では我慢できない。

近ごろ、店内から外の通りを眺めていると、自分がちがう鳥かごへ行きたがっている小鳥に思えることがある。危ない、危ない。

泉さんがこだわりつづけるアナーキー。英語で「無秩序、混乱状態」の意味である。

（ノンフィクション作家）

お金では計れない豊かさ

アニーは44歳。小柄で、クリクリっとした目。旦那はアルモン。近くのオランアニーは、今、島の名物になっている、キルトを縫っている。年に3、4枚縫

「カオハガンの自然はとても優しい。木陰が多くて、涼しい風が吹き抜けて